

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第827号 平成26年10月30日

スクリーンの消え去る時

9月23日付の読売新聞に、同紙地方部次長の清水美明氏が「スクリーンがある限り」という一文を掲載しています。

清水家では、毎年夏は実家のある岐阜と金沢に行く事にしているのですが、今年の夏は小学3年の娘がハワイに行きたいといい出したのだそうです。それに対して清水氏は「岐阜のじいちゃんは90歳近い。これから何度会えるだろうか。仮にあと10年生きられて、夏と春に会えたとしても20回しか会えない。だから、じいちゃんやばあちゃんに会わないといけない」と話したところ、娘は真顔で分かったと頷いたといえます。

清水氏は、このやり取りを家での「命の授業」と書いていますが、とても大切な事を娘さんに伝える事が出来たと思います。

また、清水氏は、人の死を映画のスクリーンになぞらえた哲学者の永井均氏の言葉を借りながら、父や母と会える回数が20回が19回となり、いずれ父や母のそれぞれのスクリーンが舞台から消え去る日が来る。帰省というのは、親たちのスクリーンに孫の姿を投影する作業でもある、と述べています。

「時」は無限に刻まれますが、人間は、その「時」の中に有限にしか生きられません。宇宙の時間の中では、人の一生は線香花火のようにか細くて一瞬の輝きに過ぎません。だからこそ、その「有限の時」を如何に大切に生きるべきか、大人達は身を以て子ども達に伝える必要があるのです。

哲学者の永井均氏は、その著「哲学の密かな闘い」の中で、人の死に関して「たとえ自分が愛する人が死んだとしても、それで世界は終わったりはしません。これに対して、自分の『死』は、そこで全てが終わってしまいます。舞台そのものが無くなってしまふのです。愛する人の死は、私という舞台の上で起きる大事件にすぎません。映画でいうとスクリーンの中での大事件に過ぎません。自分の死の場合は、スクリーンそのものが消滅するのです」と述べています。

永井氏が、人の死をスクリーンになぞらえて語るのは、「死によって失われる存在」とは一体何なのかを語るためです。というのは、「死において無くなるものが何であるのか」という事を考える事によって、初めて〈存在〉という事の本当の意味が理解出来るからだと述べています。

難しい哲学の議論にはなかなかついていけないのですが、改めて実感した事が一

つあります。それは、私のスクリーンには、離れて暮らしている孫の姿はあと何回か、数える程にしか登場しないという事です。

でも、私のスクリーンに、父や母、息子等の思い出が残像として残っているように、私のスクリーンは消え去っても、孫のスクリーンに私の残像が残り続けてくれる事を密かに願っています。

もっともそれは、孫の気持ち次第という危うさが付き纏っているのですが…。

(塾頭：吉田 洋一)